

緋

向田邦子に捧ぐ

苛立ちと口論の末の沈黙に
親父の背中が歩み去り
掌を開けばそこには俺の後悔が
澄んだ瞳で見上げている

黙りこくって民謡を聴き
俺も親父も煙草をふかす
透明で冷え冷えとした冬の夜に
誰かが疲れて帰宅する引き戸の音・・・

肩にひっそりと降る哀しみに
俺の背中が歩み去り
またたく星を見上げれば
そこには静かな決心が

親父の二の舞を踏もうと呟く
平凡で、なおその上に平凡な生活を
それでいい、それでいいと
親父の二の舞を踏もうと呟く

(1985.1.31)